

鼎談

杭全神社と平野のはなし

[講師]

藤江 正謹氏 (杭全神社宮司)

鶴崎 裕雄氏

(帝塚山学院大学名誉教授／センター研究員)

北川 央氏

(大阪城天守閣研究副主幹／センター研究員)

[司会]

内田 吉哉 (センター特別任用研究員)

1. 開会

内田：本日の司会を務めさせていただきます、当センター特別任用研究員の内田吉哉と申します。よろしくお願ひします。開会に当たりまして、高橋隆博関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長より、ごあいさつを申し上げます。

高橋 隆博 (なにわ・大阪文化遺産学研究センター長)：

今日は、あいにくの雨の日でございます。昨日までは大変いい天気だったんですけども、今日は足元がお悪い中お集まりいただきまして大変ありがとうございます。

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」、大変長ったらしい名前でございますけど、これは文部科学省の研究事業でございます、2005年度から始まったものでございます。ちょうど今年で4年目でありまして、いわゆるこの研究事業は時限立法といいますか、5年間が一応の区切りでございます、来年度(2009年度)でちょうど5年目を迎えるということでありまして、しかし、5年間だけで果たしていいのかという問題がありますので、その後については少し考えなければいけないなど、こういうぐあいに思っております。

最近、「文化遺産」という言葉を随分あちこちで目にいたしますけど、「文化遺産学」という名前は私どもが考えた名前でございます。その文化

遺産学の中身につきましては、今日の鼎談の中で少しずつお話が展開されていくと思いますけれど、要するに地方自治体とか、あるいはさまざまな伝統技術・伝統文化についてはそれぞれのご論考・ご研究の蓄積がありますけど、まだまだフォローしていない、あるいは気がついていないところもあると思います。そういったところに焦点を当てて研究を進めていこうという研究事業でございます。

さて、今回で地域連携企画は4回目を迎えます。第1回目は、^{ふじいでら}藤井寺に^{どうみょうじ}ございませう道明寺天満宮で行ないました。大和川左岸の河岸段丘にありました、縄文から古墳時代ぐらまで続いた^{こふ}国府遺跡から発掘されました考古資料は、12点の重要文化財を含んでおりまして、これは関西大学のほうで所蔵しております。ところが、地元の方がこの国府遺跡の中身について、ほとんどご存知ありませんでした。「それじゃあ、^{でがいちゆう}出開帳を」ということで、この発掘されたものを現地に持って行って、そこで住民の方がたに知っていただこうと、こういう試みでございました。

第2回目は、JR大和路線の沿線に八尾というところで行ないました。八尾は江戸時代に^{やすなかしんでん}安中新田という新田会所があったわけですが、新田会所でありました^{うえだ}植田家、この植田さんが土地から^{じゅうもつ}什物を含めてすべて八尾市にご寄贈になったわけですね。それにつきまして八尾市のほうから私どものほうに調査を依頼されまして、その調査の成果の一端を^{りゅうげ}龍華コミュニティセンターというところで、植田家の歴史がどういふものなのか、あるいは植田家に伝わっている、いわゆる文化遺産とは何なのかということを行なったわけでございます。

第3回目は昨年、平野の町の中にごいませう^{せんこうじ}全興寺さんの境内をお借りいたしまして、私どもがあそこに博物館を特別に参加させていただきまして。名前は「もめん博物館」ということでございます。この平野は綿作の中心地でございます、ちょうど全興寺の前の大きなアーケードのある商店街が、すなわち綿問屋がたくさんあったところでございます。そこで、綿づくりや糸くり、糸紡

ぎを地域の子供たちに体験していただきました。

今年は、幸い藤江宮司さんのご理解をいただきまして、この会場でもって平野の歴史あるいは文化遺産、こういったことについて語り合う機会をつくりたいと思っております。なぜか考えますと、第1弾から第4弾まですべて南大阪でして、北大阪がないんですね。片手落ちだというぐあいにおっしゃられるかもしれませんが、逆に言えばそれだけこの地域は魅力にあふれているというぐあいに理解しております。



高橋センター長

少し長くなりますけれど、昨日まで高松におりました。ある大学の集まりがありまして、香川県のほうでは町を散歩する企画を行なっているんですね。それでちょっと奇異に感じましたのは、香川県には町を歩くと古い銭湯屋さんといった、さまざまな文化遺産が残っています。ところが、これをなんとか指定文化財に持っていきこうという動きがあるようなんです。「ちょっと待てよ」と。指定文化財というのは国宝とか重要文化財が指定文化財なんです。ところが、そこばかりに目を向けますと、実は大事な足元にある文化遺産を我われは見落としがちになるわけです。近代日本はガリバーのような歩幅で歩いてきました。そのために、ほかにあるものをことごとく捨て去ってきたわけです。「そういったものに光を当てなければいけない」というのが私どもの一つの考え方でございます。

また、10月5日に、関西大学においでいただいている留学生を平野に案内しまして、何が自分の目にとまったのか、心を打ったのかということ写真で撮っていただきました。その写真が後ろ

に並んでおります。いわゆる「文化」とよく言いますが、やはり他国の文化を理解することが文化の第一歩なんです。ですから、理解しあえない文化なんてのはあり得ないわけです。学際とか国際なんていうのはそうなんです。他の学問であったり国を理解することこそが「学際的」「国際的」の第一歩なわけでございます。そういう意味合いで、留学生をここにご案内したわけです。おつけ 10名ほど、少し肌の色の違う留学生がドドッと押し寄せるだろうと思っておりますので、どうぞこちらのほうも少し可愛がっていただきたいと思っております。

最後に、今さらながら、今日ご鼎談いただくお三人については、説明するまでもないと思っておりますけど、少しご紹介させていただきます。

藤江宮司さんは、連歌会を再興といひますか復活させた張本人といひますか、ご尽力いただいた方でございます。もちろん宮司さんは宗匠そうしやうの一人でございます。島津忠夫先生しまづただお（大阪大学名誉教授）もそうでございますし、光田和伸先生みつたかずのぶ（国際日本文化研究センター准教授）もそうでございます。そしてもう一人、帝塚山学院大学名誉教授の鶴崎裕雄先生も4人の宗匠のうちのお一人でございます。何よりも、平野あるいは平野の連歌についてお詳しい方でございます。そしてもう一人、平野区誌の編集委員でございまして、平野のすぐ近くの松原市がご出身でございます、大阪城天守閣研究副主幹の北川央先生をお迎えしております。平野を語るにはこれ以上のメンバーはないというお三人でございますので、存分にお楽しみいただきたいと思っております。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

2. 前半の部

内田：それでは、「杭全神社と平野のはなし」前半の部を開会したいと思います。

先ほど、センター長のほうからもご紹介がございましたけれども、お話いただく先生方を簡単にご紹介させていただきます。まず、一番左側の先生がこの杭全神社の宮司の藤江正謹先生です。今回の企画で、会場をご提供していただいただけでもありがたいのですが、そのうえ「是非とも鼎談にご登場願いたい」という大分図々しいお願いをいたしました。最初はちょっと恥ずかしがっておられたんですけど、私が何とか頑張って口説き落としました。

真ん中におられますのが帝塚山学院大学名誉教授で、私たちの研究センターの연구원もしていただいております鶴崎裕雄先生です。私たちは、最初あまり杭全神社にご縁がなかったものですから、鶴崎先生を先頭に立てて宮司さんのところへごあいさつに伺ったのでございます。

一番右側におられますのが大阪城天守閣の研究副主幹で、私たちの研究センターの연구원もしていただいております北川央先生です。お話の中でおいおい出てくるかと思いますが、実は北川先生も平野に大変ゆかりの深いかただとお聞きしまして、先生の若かりしころのお話などが伺えるのではないかと考えております。先生方、今日はよろしくお願ひいたします。



講師の先生方

さて、「杭全神社と平野のはなし」というタイトルがついているんですけど、最初はものすごくカチカチのタイトルがついていました。よく覚えていないんですけど、「平野の歴史と文化

を語る」とかそういうものすごいタイトルがついていたんです。それで、先ほどご挨拶申し上げましたセンター長に「そんなことでは」というお叱りを受けました。それに、平野の町づくりの会議にもお世話になっていまして、ご相談させていただいたんですけど、そこでも「自由闊達な平野かたぎから言うたら、ちょっとそのタイトルは硬いねん。もっと柔らかくて和やかな鼎談というのはできないのかな」と言われまして、何とか硬い頭を無理やり柔らかくして、今のタイトルに落ちいたんです。とはいいまして、やっぱりこれから先生方にお話を伺おうとすると、杭全神社や連歌という硬いところから話がスタートせざるを得ないんです。

さて、杭全神社には連歌所がございますそうで、その年号などを調べると、今年がちょうど杭全神社の連歌所が建てて300周年に当たるそうです。まずはそのあたりのお話を聞いてみたいと思います。鶴崎先生、あれはどこから数えて300年なんでしょうか。

鶴崎：今急に振られたので、どういうふうにご答えたらいいかな。今の杭全神社の境内に入ってまいりまして、社殿の向かって右側のほうにあるのが連歌所であります。この連歌所が出来たのは、新しい大和川ができた後の宝永五年（1708）ですから、それからちょうど300年ということでございます。

連歌所というのは、全国の神社にいくつもあったんです。住吉大社にも連歌所がありまして、昔の絵を見ておきますと、東のほうの鳥居のちょっと横のところに連歌所があって、それが絵図の中に描かれているんです。それが、今はもう移築されまして、社務所の中の一部に入っているんです。こちらのほうの、杭全神社の連歌所を拝見していますから、ぱっと見ると連歌所だとわかるんです。ところが今は、神官さんが着物を着がえたり、それからお配りするものや荷物を置いたり、そういうふうな使い方をされているところなんです。そういう意味で、連歌所があって、今連歌所を実際に連歌の会場として使っているというのは、もうこの杭全神社だけということですから、

連歌所として生きているというのは全国でこだけということでございます。

後でまた、九州の神社のお話が出るかもわかりませんが、そういうふうな意味で、連歌が生かされているのが杭全神社の連歌所です。またお帰りのときにでもご覧になればと思います。その辺で宮司さんに何か連歌所についての話を聞いてみましょう。



鶴崎裕雄氏

藤江：さっき、その宝永五年の話が出たんですが、私もずっと昔から聞かされているし、『連歌所記』という書き物にも宝永五年と書いているんですね。先般、修理しましたけれども、そのときに宝永五年の棟札を探したんですね。何枚か出てきた中に一番古いものは享保二年（1717）だったんです。それで、「じゃあ何から宝永五年になったのか」というのが今のところわからないんです。神主としていつだと聞かれたら宝永五年でいいんですけれども、歴史学者として聞かれたときに、「じゃあ宝永五年の根拠は」と言われたらちょっと困る状況かなと思うんですね。でも一応、神社では宝永五年でいこうかと思っておりますけれども。そういう出来事がありましたですね。

内田：今の神社ということでお聞きしますと、やっぱり連歌のために使っておられるんですか。

藤江：連歌を再興するまでは連歌所という名前ももう消えておましてですね、私らが子供のときには奥座敷とか言われていたんです。それで、もう連歌そのものの言葉を耳にすることもなかった状態ですから、私らは子供の遊び場であったし強

部屋であったし、それからいとこたちがたくさん来たときには、たくさん何人も並んで寝られる楽しい部屋だったんですね。何が違うかというと、長押の上に三十六歌仙の扁額があることなんです。私のほうは三十六歌仙と思ってないですから、百人一首のかるたの大きいのが並んでいるんだと思っていたんですけれども。そんなところで遊んでいましたから、子供のときにはボールをぶつけたこともありますし、チャンバラをしていて三十六歌仙に竹の棒で穴をあけたこともあるんです。そんな状態なので、多分この建物はなくなっていくんだろうなと思ってはいたんです。

ところが、建築を研究されている大阪府立布施工業高校の東野良平先生と京都府立大学の林野全孝先生、その二方が見えて、「これは連歌所といって大変貴重な建物だ」ということを聞かされて、「へえっ」ということだったんです。いかほど貴重かというのは、その後おいおいわかってくるんですけども、残すべき建物であるというふうに認識を変えたのはもうわずか25年ぐらい前の話です。

内田：今日北川先生にお越しいただいている一つの理由に、北川先生が平野の高校に通っておられたということがあるんですけども、平野に通っておられた高校生から見ても杭全神社というのは有名だったんですか。

北川：高校生の間で有名だったかどうかは正直わかりません。私は流町にある大阪教育大学の附属高等学校平野校舎の出身なんで、高校時代は今日のタイトルのとおりで平野を自転車で探り回っていました。

私は松原市の大堀というところに生まれ育って、今もそこに住んでいます。平野区とは大和川を隔てて南側に位置しまして、昔の街道名でいうと古市街道というのが平野から出て、川辺というところで大和川を渡って着くところが大堀です。そこから藤井寺の方へ行くのがこの古市街道で、私が子供のころには今のJRの平野駅、当時は国鉄平野駅でしたが、そこから長原・川辺を通過して近鉄南大阪線の河内天美駅まで近鉄バスが通って

いたんです。子どものころからこのバスでずっと平野へ買い物に来ていたんです。買い物といったら平野の商店街か針中野の商店街でした。バスに乗っていると、平野駅に着く少し前に大きな鳥居があって、横に大きい建物があるんで、僕はあれが杭全神社だとずっと思っていました。実は鳥居は杭全神社のもので、隣の大きな建物は金光教さんだったんですね。それに気づいたのが高校生のときでした。このバスの経路でずっと平野に来ていましたし、もちろん杭全神社の名前はすごく有名でしたけれども、そういう連歌所とか歴史的な話はあまりよく知りませんでした。

内田:僕たち関西大学の人間は、どうしても頭でっかちなところがありまして、「杭全といえば連歌や」というところから入りますから、例えば高校や中学に通っておられたら、地元の有名なスポットになってるのかななんて思いました。

北川:そういう意味ではすごく有名です。杭全神社も有名でしたし、大念仏寺さんとか、あとさつきから名前が出ている全興寺さんとか、そういったあたりは平野ではもちろん有名なところですけどもね。当時は歴史的に重要かどうか、建物の貴重さとか、そんなことはよくわからずにいた、ということです。

内田:先ほどちょっと藤江先生から三十六歌仙にボールをぶつけたお話が出てきましたが、以前僕が見せていただいたときに随分きれいな三十六歌仙の扁額が掛かっていて、デジタル複製したものにかわっているというようなお話がありました。

藤江:三十六歌仙の扁額には常用と非常用というか、ハレの日用のものと二種類準備されていてね、普段は襖仕立ての紙に描いた三十六歌仙が掛かっていて、それはもう日に焼けてぼろぼろなんです。それで、蔵の中を見ると、何かハレの日のために桐の板に金箔を張って、その上に直に描いた桐板仕立ての三十六歌仙が入っていたんです。その桐板のほう古いもので、襖の常用のほう

は享保五年（1720）のものなんですね。少し古いほうは延宝七年（1679）のもので、まだきれいに全く日に当たらずに保存されていました。それで、「どうせ複製をつくるんだったらきれいなほうでやろう」ということで、桐板のほうを全部写真に撮ってデジタル処理をして、今のものをつくったんです。あれは、実は今ならもう少しいい材質のものがあると思うんですけども、当時はまだフォトショップ（画像編集用ソフト）か何かで初めて出たところで、フィルムそのものに耐候性の証明がなかったんです。それで何年ぐらいこの色調がもつんだろうと思っていました。お金がなかったもんですから、モニターでしてあげますということで、住友スリーエムから協賛をいただいで安く仕上げたものなんです。ですので、大分色が変わってきましたね。



藤江正謹氏

内田:古くて貴重なほうを杭全神社さんで管理されているのでしょうか。

藤江:古くて貴重なほうというか、私が素人目に見ても、常用に使っているもののほうが絵が上手なんです。これは狩野派の方が描いた絵で、見るからにプロの描いた上等な絵なんです。それで、その桐板のほうは、地元のちょっと器用な方が描かれたという感じの絵で、芸術的には価値が逆転するのかなと思うんですけども。とにかくそのきれいな絵は蔵の中にきちっとしまっているんです。

内田：僕が見たときはデジタルのほうなんです、鶴崎先生と北川先生は、貴重なほうをご覧になったことはあるんでしょうか。

藤江：デジタルができるまでは、しばらく飾っていたときはありますし、連歌所として再興したときの最初の連歌会にも、それを出していましたね。

内田：連歌所の復興は、発起人も含めてどういういきさつで進められていたんでしょうか。

藤江：それは、先ほどの話から何回も出てくるように、全興寺の川口良仁かわぐちよしひとさんが私と同級生でして、川口さんが含翠堂講座がんすいどうというのを5月5日と10月10日の年二回やっておられまして、一つやると「じゃあ次は何をしようか」という話になるわけですね。それで、たまたま社務所の前でその話をしている、「この連歌所は何か貴重らしいで」「せっかくもう日本でここしか残っていないというんだったら、これを使って何かやろうか」と。そのころは連歌なんかものになるとは夢にも思っていなかったもんですから、「連歌って何や」というぐらいのレベルなんですよね。それで、「とにかく連歌の研究者を探して相談に行こう」という話から始まっているんですよ。

内田：今でも月一回されているんですか。また、そのときには鶴崎先生もお越しになるんですか。

藤江：原則月一回ですね。

鶴崎：ちょうどおとといに、ここでさせてもらったところです。

内田：日は決まっているんでしょうか。

鶴崎：いや、大体やったときに、「次はいつしようか」と言って、「じゃあこの日が空いてますから、この日にしましょうか」と言って決めています。

内田：僕も、「ちょっと勉強しないと」と思って連歌の本を読みましたが、どうも決まりとか

がちんぷんかんぷんで、参加される方は随分勉強されて来ておられるんですか。

鶴崎：勉強というよりも、やっているうちに慣れてくるというような感じはしますね。

藤江：必要なのは、知識の豊富さじゃなくて図太さですよ。

内田：僕はちょっと無理ですね。

鶴崎：いやいや、慣れてきたらできますよ。

藤江：確かに、今からはちょっと入りにくいかもしれないですね。というのは、20年前に始めたときはみんなが初心者だったんですよ。それで、「連歌ってどんなもんなんやろう」というところからはじめまして、知らないことが決して恥ではなかったというか、連歌をブロックのレンガと間違えても誰も笑わなかった時代だったんですよ。だからあまり臆することなく座に入れましたし、「何も考えないで詠んだようなものでも本当に採ってもらえるのだろうか」と思いながら出した句を、先生方が一生懸命に「こうしたらいい」「ああしたらいい」と言って調整を加えた上で、「じゃあ、あなたの句にしておきましょう」というような形でスタートしましたから、本当にみんなで支え合っていた感じですね。

それから、だんだん形が決まっていたので、レベルは別にしても、今は前提として「こうでなきゃいけない」というものがまずあるわけですね。だから、確かに敷居は1センチか2センチは高くなったかもしれないですね。

鶴崎：今、平野の図書館で月一回、第一金曜日に図書館連歌というものをなさっているんですけども、それはすごく入りやすいそうですね。

藤江：ええ。図書館連歌は、その1センチ、2センチの敷居をなるべく下げようというところでスタートしているんですよ。

内田：では、インターネット連歌の役割というのは。

藤江：インターネット連歌は誰でも入れる仕組みなんで、もうぐちゃぐちゃになるんじゃないかというのを一番恐れていたんですね。でも、始めてから10年ぐらいになるんですけども、たまにおじま虫が入ってきて削除することがあるぐらいで、基本的にはかなりの高レベルで水準が保てているんです。何でなのかはちょっとわからないですけどね。

内田：杭全神社さんは、立派なホームページがあったり、インターネットで連歌をされているので、すごくITに強い神社のようなイメージがあるんですけども、そういう発想をしたり、それを実行したりする先進的な部分というのはどのあたりから。

藤江：いや、今はもうコンピュータのほうがすごく進歩しましたんで、お世辞にも詳しいとは言えない状況なんです。だけど、コンピュータというものが世にあらわれたときから関心はあって、20年前に鎌倉からこっち（平野）に帰ってきたときに、「この神社でコンピュータというのをどう活用できるか」ということをいつも考えていたんですね。それで、氏子崇敬会の名簿管理と、それからもう一つ文化的なもので何かと考えて、インターネット連歌というのをやってみました。

内田：ほかにもお話を聞きたいものですから、ちょっとお話がかわりますけれど、つい杭全神社というやっぱり連歌が有名で、連歌所がすごく貴重なんだというところが第一印象なんですけれども、本殿も重要文化財になっておられるんですよね。そこには熊野権現くまのごんげんが祀られているので、やっぱり世界遺産に指定されている熊野と平野で街道が行き来するのは何か関係があるんでしょうか。

藤江：そうですね。熊野の街道沿いにできた八王子社はちおうじとか熊野王子くまのおうじというお社と、ここが成り立ち

において必ずしも重ならないと思うんです。けど、平野の町の人というのは、非常に自立の気に富んでいるというか、あまりここから出かけないでこの中ですべて用を足そうという、自治都市としての誇りというようなものがあつたと思うんですね。それで、それぞれにみんな時代的にずれがあるんですけども、世の中で稲荷信仰いなりや住吉信仰すみよし、八幡信仰はちまんといった新しい信仰がはやれば、「その神さんをお祭りして自分たちの町の中につくってしまおうじゃないか」というような気風があつたんじゃないでしょうかね。だから、祭神は大体一柱か多くて三柱か四柱のお宮が多い中で、ここは数え上げれば両手では足りないぐらいで、口の悪い人は「神さんのデパート」と言うんですけどね。まあ、あらゆる歴史上に登場する神様はお祭りされているという珍しい神社ですね。そういう関係で、熊野信仰が鎌倉時代から江戸時代までかなり長く盛んでしたので、その間に信仰が盛んになるにつれて第二殿、第三殿という形でお社がいっぱいになったんだと思うんです。

内田：連歌所も本殿もすごいものなのですが、この間僕たちの研究センターで、杭全神社の蔵に入れてもらいまして、中にどんなものがあるのか調べさせてもらったんですけども、そしたらものすごくいろいろなものが出てくるんですよ。ちょうどその時に、蔵の中で錦の袋に入った刀を見つけたんですけども、ああいう刀というのはどういふものなんでしょうか。

藤江：古い刀はすべて太平洋戦争のときに供出して戻ってきていないんです。だから、今ある物はすべて戦後に、「こんな家の蔵から出てきたけれども置いておくのは気持ち悪いから神社で預かってください」というような形で奉納されたものなんです。それもそんなにたくさんはないですよ。

内田：つい、神社に刀があるというと、例えば名のある武士が名刀を奉納したのかなと思って、にやにやしています。

藤江:そんなのも、昔はあったかもしれませんね。

内田:どうなのでしょう、北川先生。特に近世において、杭全神社と武士とのゆかりはないんでしょうか。よく大坂夏の陣のときには、このあたりも合戦場になったということでお墓もありますけれども、杭全神社や平野あたりで、例えば大坂夏の陣の合戦になったあたりの逸話があったりするんでしょうか。

北川:そうですね。さっきの話にさかのぼりますと、僕はここに熊野権現が祀られていることにすごく興味を持っているんです。熊野の信仰というのは、皆さんもよくご承知のように、平安時代くらいから中世にかけてたいへんはやり、全国を席卷して各地に熊野社が成立しました。ここ平野でももちろんそうした流行にのっとって熊野権現が祭られたとは思いますが、杭全神社だけではなく平野というところ全体を見渡したときに、いつも「都市」としての側面ばかりが強調されるように思います。「自治都市」とか「環濠都市」とかいった具合にですね。けれども僕自身は「聖地」というキーワードでもこの平野を読み解けるのではないかなと思っています。

熊野の信仰というのは、有名な説教節「小栗判官おぐりはん」で語られるように、よみがえりの信仰を集めた聖地なわけですね。宿病で苦しんでいる小栗判官が、熊野へ行って湯の峰の温泉につかることによってもとの体に回復するという、よみがえりの聖地として知られるわけですが、ここ平野の地でもやはりよみがえりが語られます。この杭全神社とは非常にかかわりの深い長宝寺ちやうぼうじさんの「よみがえりの草紙」に記される話は中世の信仰を考える上で非常に重要な中身を持っています。慶心けいしんという尼さんが突然亡くなり、閻魔大王のもとに引き出されるという話なんですけれども、そのときに慶心が熊野詣の際に使った杖を持って閻魔大王のもとに行くというストーリーになっているわけですね。なぜ熊野詣で使った杖を持って閻魔大王のところに行くのかということですが、やはりこの「よみがえりの草紙」に語られる話にも熊野信仰の要素を認めるべきじゃないかなと思っ

ています。もちろん都市的な機能が十分に備わっていて、そういう面も平野を考える上でたいへん重要だとは思いますが、他に「聖地」としての側面も持っていた、少なくともそう認識されていた時代があったんだろうと思っています。あの「よみがえりの草紙」に語られる閻魔さんからお手判てはんをもらったという話は、信濃の善光寺ぜんこうじで語られる話とほとんど同じ内容です。信濃の善光寺というのも善光寺縁起で語られるようによみがえりの聖地で、善光寺や熊野また四天王寺など中世の霊場では盛んによみがえりの信仰が喧伝されました。そうした、中世の庶民にすごく普及したよみがえりの信仰が、この平野でもたいへん熱心に信仰された、そんな時代があったんじゃないかなと思っています。大念仏寺だねんぶつという融通念仏宗の本山がこの地に営まれてくる背景にも、そういう信仰を想定すべきじゃないかなと思っています。



北川 央氏

僕は平野を熊野信仰という側面からもう一回見直してみたいと以前から思っていました。地元の人だけではなく、遠隔地から信仰のため、お参りにやって来る、参詣に来るという要素も持った土地柄だったんじゃないかと。そういう視点で平野を見直したら、いろいろわかってくるかと思うっています。

武将の話というと、杭全神社に関して僕はあまりよく知りません。大坂の陣のときに平野は甚大な被害を受けます。冬の陣のときには町全体が焼き払われたんですね。今日は、東西両末吉すえよしさんや辻つじさんといった七名家しちめいけの方もお越しいただいているんですけども、西の末吉さんは、徳川家からの朱印状を平野へもたらす役割を果たされまし

た。また東の末吉さんは大坂城に連れて行かれて監禁されるという事態にも遭いました。平野自体は大坂の陣の渦中で、豊臣と徳川のせめぎ合う場所でしたので、秀頼からも禁制が発給されるし、徳川家康・秀忠からも禁制が発給されるという大変な巻き込まれ方をしました。杭全神社も全く無縁だったとは思いませんけれども、杭全神社に関して何か逸話があるのかどうか、残念ながら私は存じ上げなくて、もし藤江宮司のほうで何かそういう大坂の陣で杭全神社が大変な目に遭ったとか、誰かが戦勝祈願をしたとか、そんな伝承があったらお聞かせいただければと思うんですけども。

藤江：連歌所や多くの社殿が焼き払われたという以外には聞かないですね。

鶴崎：来年（2009年）のNHKの大河ドラマが直江兼統なおえ かねつぐなんで、ちょうどそのあたりですよ。

北川：直江兼統に関して言うと、末吉さんのところに直江兼統の手紙があるんですね。これは兼統の主人である上杉景勝うえすぎかげかつが豊臣政権に巻き込まれていく、ちょうどそうした時期に出された非常に重要な文書で、直江兼統が上杉領国内で末吉家の交易活動を認めるという内容です。平野の町人が上杉領国内で自由に商売できるようになっていくんです。大河ドラマ「天地人」で注目される資料になってもおかしくないものです。

鶴崎：それは是非教えていただきたいです。といいますのは、直江兼統は連歌をする武将なんです。直江兼統は上杉氏に仕えていました。上杉氏は、皆さんご存知のように、越後の戦国大名です。そして秀吉の命令で会津に行くんです。会津では百二十万石となるんです。ところが関ヶ原の合戦いしだ みつなりで石田三成に味方して米沢に移され、三十万石になってしまうんです。そして、その上杉氏は大坂の陣のときは大坂へやって来て活躍するんです。兼統はその上杉氏に仕えている家臣ですから、実によく連歌をしているんですよ。そして武将というものは連歌しながら団結力を養ったりしていくん

です。だから、私はこの11月に連歌の関係で、高橋先生ご出身の山形へ出かけることになるんですけれどもね。今のお話を聞いてぜひまた機会があったらどうぞよろしく。

北川：東末吉家・西末吉家両方にそれぞれ別個に書状が来ていまして、上杉領国内で商業活動を自由に行なっているという内容ですので、既にその時点で東末吉、西末吉の両家が別個に商業活動を展開しているということもわかるんです。東末吉家については「越後分国中諸関往還」の自由を保障しているのに対し、西末吉家については「分国諸浦について往還」の自由を保障していて、両家に対する内容が異なっているのが興味深いところです。のち西末吉家は朱印船貿易しゆいせんで大活躍しますが、既にこの頃から西末吉家は海運が中心だったんですね。

鶴崎：全国の武将からはなにかと注目をされている場所なんですかね。

北川：そうですね。やっぱり平野の商人の持っている実力や活動の内容というのが注目されていたんだと思います。

藤江：さっき、杭全神社に戦勝祈願がなかったかと聞かれましたけれども、そういった頃の物は神社に残っていないんですね。というのは、その当時は神仏習合しんぶつじゆうごうで、境内にあったお寺の十二坊の別当なり社僧なりがお守りをしていたのですが、仮に戦勝祈願があったとすれば、その人たちが受け、また記録もされたんだらうと思います。その記録というのは廃仏毀釈はいぶつ きしやくのときに一切処理されてしまって、こちらには残っていないんです。あるとすれば、七名家の文書とかそういうところには含まれているかもしれないです。

内田：実は僕はまだ聞きたいことをあと10ほど用意しているのですが、いったんここで区切らせていただきます。先生方、ありがとうございます。

3. 後半の部

内田：それでは、「杭全神社と平野のはなし」の後半の部を始めさせていただきたいと思います。

さて、先ほど前半の部の最後で申しましたように、あれを聞こうかこれを聞こうかと列挙していたら10ほども聞きたいことがありまして、これが山積みになっているんです。ただ、「杭全神社と平野のはなし」というタイトルをつけてしまいましたので、後半は杭全神社を中心として、平野の町の話とも絡めたお話を伺いたいと思います。

留学生の皆さんは平野の町の中を歩いて、杭全神社にも来て写真を撮っているようなんですけれども、僕の個人的な感想では、神社と町のつながりといいますと、一番大きいのはやっぱりお祭りかなと思うんです。そこで、杭全神社のお祭りということについて、また先生方にお話を聞いてみようと思います。



内田吉哉氏

杭全神社でやるお祭りにはいろいろあるんですが、留学生の方もいますから神社でやるお祭りについて少しかみくだいて説明しますと、お米をつくる農業にちなんだお祭りというのが大事なお祭りになっているんです。農業ですから田植えをするときのお祭りですね。春に稲を植えるときのお祭り、これがひとつ。それから秋になってお米ができて収穫するときのお祭り。この二つが神社のお祭りとしてはとても大きなお祭りになっています。ですから春のお祭りと秋のお祭りというように、神社ではすごく重要なんです。

それで、杭全神社では春のお祭りとして御田植神事、つまり田植えのことをやるお祭りというのがあるんですけれども、私たちの関西大学で民俗

学を担当しておられる黒田一充先生（センター研究員）からお話を聞きまして、杭全神社のお田植神事というのはものすごく珍しいお祭りだそうです。お祭りのときに田んぼを耕す動作も入るんですけれども、何か小さな人形が出てきて、その人形に何かおしっこをかけるような動作が入るといのがあって、その小さな子供の人形を使うというのがとても珍しいんだということなんです。そこで、先生と話をしている思ったんですけど、そういう人形を使う仕草というか、ああいうのはどういう意味があるのか、伝わっているものはあるんでしょうか。

藤江：解釈については、神様の依代よりしろだというような説を立てられる方もありますけれども、特に神社としてその人形に役割を背負わせているわけではないんです。その辺は学者先生のほうがお説をお持ちなんじゃないかと思うんですね。

北川：僕は、こちらのお田植神事を残念ながら拝見したことがなくて、また一度拝見したいと思うんですけれども。詳しくはわかりません。

内田：ほかの神社でも、ああいう人形を使われたりしているのはご存じですか。

藤江：緊張する場面と緊張を解く場面が、大体そういう神事には用意されているんですね。おしっこをさせたり、御飯を食べさせたりというのはおそらく緊張を解く場面で、もどきの部分だと思うんですけれども、太郎坊・次郎坊を神様の依代とするという説を耳にしてからあまり信念を持って語れなくなってしまったんですけれどもね。太郎坊・次郎坊という呼び方をするんですね。それで、やっぱり生産の儀礼ですから、子供にはこれから将来を担っていくという役割を背負わせているんだと思います。うまく神様のことについては解釈を加えられないですけど。

御田植神事について確かなところをひとつ言えば、もともとは1月13日、小正月の予祝行事です。それが、宮座を組んでおられた方たちのご都合で、4月13日に、3ヶ月繰り下げて今は実施

されているんですけれども、もともと神社のほうは奉納を受けるという側の立場で、あくまでその主体は宮座のほうにあったわけです。宮座で一番中心を勤めていただいていたのが西の末吉家でございます。

内田：そうしますと、例えば人形に御飯を食べさせたりという所作をやる役割の方というのは、例えば宮司さんですとか^{ねぎ}彌宜さんではなくて。

藤江：シテの方がされる所作なんです。太郎坊・次郎坊は、どういう役割なんだということはおそらく西の末吉家のほうには解釈が伝わっているかもわからないです。私たちは見て感じるだけですのでね。そういうところはちょっとよくわからないですね。

内田：お祭りの仕草とかを事前に練習とかなさっているんですか。

藤江：今は、保存会がありますから事前に準備しております。昔、先代の末吉^{かんしろう}勘四郎さんに聞いた話ですと、「六歳のときからわしは面箱持ちをやってこのお祭りを奉仕してきたんや」と。何ていうんでしょう、一生の自分のつとめる業としてですかね、「子供のときからお父さんやおじいさんの背中を面を持ってついて歩いてた」とおっしゃっていましたね。

内田：ちょっと御田植神事でこれ以上ってというのがしんどくなってきたんですが、もう一つ。平野は夏のお祭りが有名だということを伺っています。僕たちの研究センターでは、大阪の夏祭りカレンダーを作ったんですけれども、大阪の夏祭りといってもたくさんありますから、全部を一つのカレンダーに入れるのは無理だということになりました。「じゃあどうやってカレンダーに載せるお祭りを決めようか」となったときに、「やっぱり何か特徴のあるお祭りがいいだろう」ということで、平野の夏祭りというのは幾つかおもしろい特徴があるというので、私たちのカレンダーに入れさせてもらったんです。

それでひとつには、平野の夏祭りには、難しい言葉で言ったら神仏習合の名残が残っているというのがありまして、つまり本来神様が乗っている御神輿が、神社を出てお寺に行ったりとかなさっておるんですよ。それと、だんじりが出るんですけど、これが別名「けんか祭り」と呼ばれるぐらいで、ちょっと遠慮することもあるぐらい激しいんだと聞いております。

それで、以前にも藤江先生にちょっとお伺いしたんですけれども、杭全神社さんの大門の根元にちょっと継ぎ足した跡があって、「お祭りのために高さを上げてあるんだ」というお話を聞かせてもらったんですが、その辺をもう一度お聞かせいただきたいと思いますと思ひまして。

藤江：第一殿のご祭神は^{すさのおのみこと}素戔鳴命、^{ごすてんのう}牛頭天王なんです。お祭りそのものは祇園祭と同じなんです。だんじりが出るので、「だんじり祭り」と最近では言われていて、岸和田のだんじり祭りと一緒になっているんですけれども、同じだんじり祭りでも大阪の市街地の部分は夏祭りが多いです。岸和田なんかは9月・10月にやる秋の祭りなんです。農村部は秋の収穫にあわせたお祭りで、町の中は京都の祇園祭と一緒に、やはり病を静めるために、夏の6月・7月の食べ物腐ったりする時期にやっているというところが違うと思うんです。それで、京都もそうだったんでしょうけれど、崇り神がもたらすというはやり病を静めるために、民衆が知恵を絞った効き目のある方法が夏の祇園会です。神さんの気持ちを慰められるぞ、というのがだんじりであり、^{だし}山車であったわけですし、そのだんじりを使って町中でずっとにぎやかして神さんの前に引いてくる、これがだんじり祭りなんです。それで、「じゃあ神さんはどこにいらっしゃるんだ」というと、普段は森の奥におられるんだけれども、お祭りの時には御神輿に乗って町の近くへ出てこられるよと。「じゃあ神さんがせっかく出張してきていただいたその前をにぎやかにするために、鐘や太鼓をたたいてにぎやかにしましょう」というのが夏祭りの形なんです。



熱心に聞き入る参加者

京都の場合は四条に御旅所^{おたびしよ}というのがあって、そこへ山車を出しますけれども、平野の場合はいま神社の入り口の鳥居が立っているところの、ちょうど国道のある場所に御旅所というのがあって、そこに御神輿にお乗せした神様を運んで行在所^{あんざいしよ}をつくって、その御旅所で夏祭りをしていたわけです。それで、国道が通るということになって、そのお旅所が国に没収されてできなくなったんです。その後、「じゃあ今まで置いていたおみこし今度はどこへお祭りするねん」ということで、しばらくは国道が削った後に三角形の小さな土地が残ったんで、その小さなところでやっていたわけですけれども、やがてそれもできなくなったということで、神社の拝殿に神輿を置いてやるようになったんですね。そうすると、今までは国道のところまで持ってきてお祭りができたものを神社の奥までだんじりを引き入れなきゃいけないということになって、それでそこにその門があったわけです。その門は、ちょうど国宝になる鎌倉時代の建造物で、国のほうから、「これは国宝にするぞ」というお達しが出ていた、そういう文化財だったわけですが、その門はだんじりを通すには低すぎたわけです。町の方は、祭りをするために高さ^{かさ}を上げて、「だんじりが通れる高さにしまえ」ということで、それで国宝に指定されるのを振ってお祭りのために改造したわけですね。「今の形でもじゃあないから国宝にしようか」という話は文化庁のほうでありまして、それほど貴重な建物であるということなんですが、町の人にとってはそれよりも貴重な祭りだということですね。

内田：国宝になるのを蹴ってでもお祭りを優先するというのが、何となくわかるような気がします。僕は大阪出身じゃないんですけども、ここの研究センターに入れてもらう前に、何ヶ所かで高校の講師をやったことがあるんです。北摂の高校で一回やったことがあって、南とまでは言えませんが、上本町あたりの高校でもう一回やったことがあって。上本町あたりの高校だとやっぱり、遠くは奈良からも来ますし、河内や和泉といった、南大阪のほうからも高校生がワッと集ってくるんです。それで、北摂の高校ではあまり起こらなかったんですけど、南のほうの高校では、秋のお祭りのころになると高校生が勝手に休むんです。「何で休みやねん」って聞いたら、周りの生徒が、「あいつは今日は祭りやから来えへん」とか、「こいつは来週祭りやから来ない」とかいうように、学校の勉強よりもお祭りを優先するというようなところがあったりしました。それとさっきの藤江先生のお話とを比べると、確かに学校の皆勤出席を逃してでもお祭りに行くかもしれないです。大学でもそうなんです。私たち関西大学の同級生でもお祭りの時期になったら毎日朝からべろべろに酔っ払ってやって来ているやつがいて、そのうえ早退して帰っていくという状態なんです。

僕はもともと大阪で高校生活を送っていないから、ここは平野で高校生活を送ってこられた北川先生に、どんな感じなのか聞いてみたいと思うんですけども、北川先生もやっぱり祭りの時期になると、高校の授業を蹴ってでもお祭りに行くようなことをなされていたんですか。

北川：僕は、今日も来られている関西大学の藪田先生（センター総括プロジェクトリーダー）と同じ小学校で、藪田先生は私の先輩になるんですけども、僕の出た松原市立^{えが}我小学校というのは、江戸時代でいうと、別所村^{べっしよ}・大堀村^{おほり}・若林村^{わかばやし}・小川村^{がわ}・一津屋村^{ひとつや}という五つの村落で学区になっているんです。それで、僕が小学校のときは、例えば大堀が祭りのときは大堀の人間は休みです。それぞれのクラスにももとの五ヶ村から来ているんですけども、その日はどのクラスも大堀の人間だけいないのです。でも授業は行われている

んです。それで、別所が祭りのときは、「別所の人間は今日は祭りやからおらへん」ということで、それが学校で承認されていました。田植えとかでも、「今日はうち田植えやから休む」と言うんです。それで中学校のとき、校舎から見ていたら、隣の田んぼで同級生が田植えをしていました。そういう時代だったので、祭りの日に学校を休むことは当然だったんですね。ただ、僕らは平野の高校に来ていましたけれど、この杭全神社の氏子ではないので、この神社が祭りだから休むというのはありませんでした。とにかく杭全神社の祭りは規模がでかいので、祭りのときになったら道も全部とまってしまう。ですから祭りがいつかということは強く意識していました。



なごやかな鼎談

内田：僕のイメージでは、教育大平野というのは進学校で、普通は優等生が来るものだと思っているんですけども、やっぱり平野で休んだりする同級生とかはいなかったですか。

北川：僕らの附属平野は、平野にあるんですけども、案外平野の地元の人には少なかったんです。クラスにはほとんどいなかったと思います。みんな南海の平野線とか、国鉄の関西本線などで割合遠くから通っていたので、杭全神社の祭りに参加するような平野の地の方は、僕の同級生には誰もいませんでした。だから、見る側でしたね。

内田：今、お話に出ました南海平野線のどん詰まりの平野駅がちょうどここにあって、ものすごく特徴的な六角形の駅舎だったんですね。それで平野線がなくなるときにそれを惜しんで、町づくりを考える会を発足したと言われていたんですけども、

以前今回の準備のために伺ったときに、藤江先生はそのころちょうど東京で大学生活をしていた為に、あまりそのあたりはご存知なかったそうなのですが。ほかの先生方はどうなんでしょう。平野線や平野駅の思い出とかはございますか。

北川：僕はさっきも言いましたように、高校の同級生の多くが南海の平野線を使って通学していたんです。僕自身は大阪市バスで流町と川辺の間を通学してまして、自分だけ南海の平野駅へ行く前に同級生と別れて、市バスで帰るとするのが本来の通学ルートなんですけど、みんな南海平野線で帰るんで、ほとんど毎日のように皆と一緒に南海平野駅まで行ってたんですね。関西線の平野駅は平野郷の端になるので、南海の平野駅こそが本当に平野の駅だという感覚を持っていました。

僕は、子供のころには国道25号線が旧の国道309号線と交わるあたりでバスを降りて、商店街に買い物に来ていたんですね。全興寺さんのお不動さんに水をかけて、そこからずっと奥まで行って、突き抜けたところにあったお店でよく冷やしあめを飲んだ記憶があります。この前天満橋から歩いてきたウォークイベントのゴールが大念仏寺で、ゴールイベントにご出演いただいた講師の旭堂南陵さんきよくどうなんりょうと一緒に「成金堂なりきんどう」というお好み焼屋さんに入りました。あの「冷やしあめ屋はどうなったのかな」と思って、「昔この辺に冷やしあめ屋さんありましたよね」と言いましたら「うちなんです」とおっしゃって、「うちの冷やしあめでそないに大きくなってもらたんですか」と言っていたいたんです。ですから、商店街を抜けると、突きあたりに冷やしあめ屋があって、そこから左に行くと向こうに南海の平野駅があるというのが子供のころからの平野の強い印象でした。

だから平野線がなくなるのはすごく寂しくて、当日に高校の同級生と一緒に来ました。谷町線の天王寺からの延伸と抱き合わせというか、そのかわりになくなっちゃったんです。南海の平野線のように地上を走っている電車だと周りの風景が見えて楽しいんですけども、地下鉄で来てしまうと全然風景なんか関係ありません。今ではすっか

り平野は、僕にとって通過駅になってしまいました。

内田：先ほど休憩時間に藤江先生とちょっとお話をさせてもらって、昔は平野の町の中にもっとたくさんいろんな種類のお店屋さんやお仕事があって、大変にぎやかだったんですけども、ある留学生の人が、「大阪というのは騒がしいイメージだったけれども、こんな静かな町があるんだなと思った」という話をされたので、藤江先生は、「今でいうとそう見えるのかな」と、ちょっと感慨深げでした。やっぱり昔の物の本とかを見ますと、平野というのは昔から町でしたから、平野の名産と言ったら、木綿があったり飴だとかお酒だとか、割にそういう商業製品が書かれたようなことがあるんです。今古いお店もまだ大分残ってはるそうなんですけれど、どういうお店が昔あって今はないんでしょうかね。

藤江：なくなりましたね。多分この中の皆さんのほうがよくご存知だと思うんですけど、私らが子供のときは、鍛冶屋があってそれから傘屋、下駄屋、提灯屋、すさ屋、氷屋、みんな専門店でしたよね。さっき杭全神社は神様のデパートだと言いましたけれども、平野の町全体でデパートだったんですね。あらゆる専門職は多分そろっていたと思うんです。だから、周りの喜連瓜破きれりわりや中河内のほうから、また南河内のほうから、「平野の町に行けば何でもそろうよ」ということで、南海電車のターミナルも本当に混んでいましたし、公設市場前のバスの停留所なんかいつも人がたまって、本当ににぎやかな町だったんです。バスも、みんなその当時は平野を経由して八尾方面や河内方面などあっちこっちへ行っていました。大阪市バスは川の手前までしか行かないものですから、川を越えるのは近鉄バスしかないんですね。だからみんな平野へ集ってきていたんですね。つい最近なくなって気がついたのは「明徳堂めいとくどう」といって、さし・ます・はかり、何でも測るものは揃う店があったんです。そのつい前にはロープ屋さん。それしか売っていないんですけども、店の中にはあらゆるロープがそろっているという、そういう

お店がなくなりましたし、随分専門店がなくなりましたね。

北川：まさにそういう感覚だったので、僕らも買い物に行くといったら平野だったんですね。今日ちょっと持ってきたんですけどね、私は以前「月刊大阪人」という雑誌の編集アドバイザーをしておりまして、その雑誌で「平野郷を遊ぶ」という特集を組んだんです。すると、近年では考えられない売れ行きを示したんですね。すぐ初版が完売してしまっただけで、そのときの裏話をすると、この特集を組むときに、編集委員会では「平野は大阪の下町や」と言って、「下町特集という雰囲気の特集を組もか」という案が出てきたんです。私はさっき藤江宮司がおっしゃったような感覚です。僕ら河内の農村に生まれ育った人間からしたら、平野っていったらすごくまぶしい町だったんですね。だから「下町ってというのはそれはちょっと違うで」と反論して、編集委員会で随分やりとりをしたんですよ。でもみんなは、「下町や下町や」と言って、なかなか納得しないんですね。

繰り返しますけれど、僕らからしたら平野というのはものすごい都市だったんです。ここへ来たなら何でもあるし、とにかく買い物に来るのが楽しい町だったんですね。だから、「下町」っていう感覚には本当に驚きました。たぶん、かなり怒った表情で、むきになって反論していたと思います。

内田：それでは、北川先生がきれいにまとめていただきましたところで、杭全神社と平野の話をもてたくお開きにさせていただきます。先生方、ありがとうございました。

4. 閉会

内田：これをもちまして、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター地域連携企画第4弾「平野をさぐる」の閉会となりますが、閉会のごあいさつを当センター総括プロジェクトリーダー藪田貫より一言申し上げます。

藪田 貫（センター総括プロジェクトリーダー）：

どうも、本日は足元の悪い中お越しいただきましてありがとうございました。藤江宮司さんにはお忙しい本業がある中を、我われの催しにつき合ってくださいまして、ありがとうございました。

地域連携企画に今回、留学生の人たちに参加してもらおうというのは、起死回生のアイデアみたいなどころがあります。当初から予定していたわけでもありませんし、文部科学省に申請した書類にも書いてありません。

実は、私自身海外に行くことが多いのですが、海外に行ったときに、ガイドブックに書いてあるところに連れて行ってもらうあまり感動しないんですね。「書いてあったとおりだ」というぐらいで、悪ければ「書いてあったこととえらい違うな」という。ところが、ガイドブックに書いていないところに連れて行かれたときの感動というのは、ちょっと得がたいものがあります。

昨年11月、ドイツのデュッセルドルフというところに行きました折に、その近くでクリスマス市をやっているからといって、知人に連れて行っていただきました。近くにローマの遺跡のある小さな古い町でしたけれど、そこでのクリスマス市は生涯、忘れないだろうと思います。ホテルに帰ってガイドブックを見ましたけれども、それについてはなにひとつも載ってありませんでした。

先ほど僕はアレックス（アレクサンダー・ブシェー）としゃべっていたんですけども、彼は日本語をアメリカで勉強しており、大阪のことも調べてきたみたいで、お笑い・コメディ・たこ焼き、それに賑やかな町だということを知っておりました。けれども、「平野は知らなかった」と言います。英語で書かれたどのガイドブックを調べても、おそらく平野は載っていないと思います。ですから、彼らにとってみれば、全く情報のない

中で、平野に足を踏み入れたんです。それでいて感動を覚えたということは、この町が持っている魅力の大きさのせいだと私は思います。



藪田総括プロジェクトリーダー

外国人といいましょうか、旅人というのは意外と素直なもので、例えば京都なんかもそうですけど、どれだけたくさんの方が来て、どれだけたいそうに書いてあっても「その程度か」と思う人もいれば、何も書いてないところでもすごく感動するところがあります。とくにガイドブックに書いていないもので大切なのが、地元の人々が醸し出す「風情」なんですね。これだけは金閣寺へ行っても、京都の町の中を歩いても、ガイドブックには書いていないんですね。その風情を、彼らは平野という町に来たことで感じ取ったのだと思います。これは、われわれ日本人がもっと大事にしなければならぬものであって、われわれ自身がたっぷり味わいながら、次の世代へバトンタッチしていかなければならないものではないかと思えます。高橋センター長が、「文化遺産学」というものを大阪で立ち上げられましたけれども、そういう中で一番、狙っておられるところは、そういうものだというふうにも思えます。そのことがお互いに理解し合えたという点で、今回の企画は大成功だと思います。

先ほど、アレックスに「このアイデアどうだった」と聞くと、「大変よかった」と褒めてくれましたので、これを機に、外国の人たちとも大阪で交流する機会を増やしていきながら、地域連携を発展させていきたいと思えます。本日は、平野の方々にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

講師紹介

藤江 正謹（ふじえ まさのり）

杭全神社宮司。平野 HOPE ゾーン協議会役員。杭全神社連歌所の再興に尽力し、1987年に平野法楽連歌をスタートさせる。論考に「杭全神社の月次法楽連歌会」（『アジア遊学 95 和漢聯句の世界』、勉誠出版、2007年）などがある。

鶴崎 裕雄（つるさき ひろお）

帝塚山学院大学名誉教授。センター研究員。文芸作品を史料とした日本文化史研究のかたわら、連歌の実作にも従事。『新修大阪市史』『和歌山県史』など多数の自治体史にも執筆。著書に『戦国の権力と寄合の文芸』（和泉書院、1988年）、『戦国を往く連歌師宗長』（角川書店、2000年）、『連歌招待席 三吟集うばつくば』（和泉書院、2001年）などがある。

北川 央（きたがわ ひろし）

大阪城天守閣研究副主幹。センター研究員。織豊期政治史・近世庶民信仰史を中心に、幅広い研究活動を展開している。著書に『大阪城ふしぎ発見ウォーク』（フォーラム・A、2004年）、『おおさか凶像学』（東方出版、2005年）などがある。平野との関わりも深く、『平野区誌』（平野区誌刊行委員会、2005年）では編集委員をつとめた。